

骨

董

幸田露伴

骨董

昭和廿一年十一月三十日印刷
昭和廿一年十二月十日發行

骨董 定價 參拾五圓

著者 幸田露伴

發行者 森卯一郎

東京都麹町區內幸町二ノ三

印刷者 川口芳太郎

東京都芝區三田豐岡町八

印刷所 帝國印刷株式會社

東京一〇二
東京都芝區三田豐岡町八

配給元 日本出版配給株式會社

東京都神田區溪路町二ノ九



發售所

東京都麹町區
內幸町二ノ三(幸ビル)

東京出版株式會社

振替東京五〇二五番
電話銀座(分)七三九二番

題して骨董といふ 骨董と
いふべきほどのものならね
ど 牛渡馬勃敗鼓の皮も珍
重がらるゝ今の世に ある
ひは人の青眼を獲んと づ
うづうしくも一巻を成しぬ
戌のとし秋

露伴

目次

骨董

一

蘇子瞻 米元章

三八

金聖歎

一〇一

水滸餘話

一〇九

一丈青 病關索 赤髮鬼

閃婆

一二四

宋利夫人と石田三成

一三一

楊貴妃と香

一三八

雲南

一五三

晉の僧法顯南アメリカに至る？ 日本に來る？

二二〇

支那大觀序

二二六

沙糖

二二九

骨董

骨董といふのは元來支那の田舎言葉で、字はたゞ其音を表はしてゐるのみであるから、骨の字にも董の字にもかゝはつた義が有るのでは無い。そこで、汨董と書かれることも有り、又古董と書かれることも有る。字を假りて音を傳へたまでであることは明らかだ。さて然し骨董といふ音が何様して古物の義になるかといふと、骨董は古銅の音轉である、といふ説がある。其説に従へば、骨董は初は古銅器を指したもので、後に至つて玉石の器や書畫の類まで、すべて古いものを稱することになつたのである。なるほど韓駒の詩の「言ふ莫かれ朽子の簾に底無しと、江南の骨董を盛り取つて歸る」などといふ句を引いて講釋されると、然様かとも思はれる。江南には銅器が多いからである。しかし骨董は果して古銅から來た語だらうか、聊か疑はしい。若し眞に古銅からの音轉なら、少しは骨董といふ語を用ゐる時に古銅

といふ字が用ゐられることが有りさうなものなのに、汨董だの古董だのといふ字がわざわざ代用されることが有つても、古銅といふ字は用ゐられてゐない。習晴江は通雅を引いて、骨董は唐の引船の歌の、得董紇那耶、揚州銅器多、から出たので、得董の音は骨董二字の原だと云つてゐる。得董紇那耶は、エンヤラヤの様なもので、雖し言葉である、別に意味も無いから、定まつた字も無いわけである。其説に據つて考へると、得董又は骨董には何の意味も無いが、古い船引き歌の其の第二句の揚州銅器多の銅器の二字が前の雖し言葉に連接してゐるので、骨董といふことが銅器などを云ふことに轉じて來たことになるのである。又それから種々の古物をも云ふことになつたのである。骨董は古銅の音轉などといふ解は、本を知らずして末に就いて巧解したもので、少し手取り早過ぎた似而非解釋といふ譯になる。

又、蘇東坡が種々の食物を雜へ煮て、これを骨董羹と曰つた。其の骨董は零雜の義で、恰も我邦俗のゴッタ煮ゴッタ汁などといふゴッタの意味に當る。それも字面には別に義があるのでは無い。又、水に落つる聲を骨董といふ。それもコトンと落ちる響を骨董の字音を假りて現はしたまでで、字面に何の義も有るのでは無い。畢竟骨董はいづれも文字國の支那の文

字であるが、文字の義からの文字では無く、言語の音からの文字であつて、文字は假りものであるから、それに訓詁的のむづかしい理屈は無い。

そんな事は何様でも可いが、兎に角に骨董といふことは、貴いものは周鼎漢彝玉器の類から、下つては竹木雜器に至るまでの間、書畫法帖、琴劍鏡硯、陶磁の類、何でも彼でも古い物一切を云ふことになつてゐる。そして世におのづから骨董の好きな人が有るので、骨董を賣買する所謂骨董屋を生じ、骨董の目きゝをする人、即ち鑑定家も出來、大は博物館、美術館から、小は古郵便券、マッチの貼紙の蒐集家まで、骨董畠が世界各國都鄙到るところに開かれて存在して居るやうになつてゐる。實におもしろい事で、又盛んなことで、有難い事で、意義ある事である。悪口を云へば骨董は死人の手垢の附いた物といふことで、餘り心持の好いわけの物でも無く、大博物館だつて盜賊の手柄くらべを見るやうなものだが、そんな阿房げた論をして見たところで、野暮な談で世間に通用しない。骨董が重んぜられ、骨董蒐集が行はれるお蔭で、世界の文明史が血肉を具し脈絡が知れるに至るのであり、今までの光輝が吾曹の頭上にかゞやき、香氣が我等の胸に逼つて、そして今人をして古文明を味はしめ、

それから又古人とは異なつた文明を開拓させるに至るのである。食欲色欲ばかりで生きてゐる人間は、まだ犬猫なみの人間で、それらに満足し、若くはそれらを超越すれば、是非とも人間は骨董好きになる。云はゞ骨董が好きになつて、やつと人間竝になつたので、豚だの牛だのは骨董を捻くつた例を見せてゐない。骨董を捻くり出すのは趣味性が長じて來たのである。それから又骨董は證據物件である。で、學者も學問の種類によつては、學問が深くなれば是非骨董の世界に頭を突込み手を突込むやうになる。イヤでも黴臭いものを捻くらなければ、いつも定まりきつた書物の中をウロツいてゐる譯になるから、美術だの、歴史だの、文藝だの、其他いろ／＼の分科の學者達も、有りふれた事は一ト通り知り盡して終つた段になると、いつか知らぬ間に研究が骨董的に入つて行く。それも道理千萬な談で、早い譬が、誤植だらけの活版本で何程萬葉集を研究したからとて、眞の研究が成立たう譯は無い理屈だから、何様も學科によつては骨董的になるのがホントで、ならぬのがウソか横着かだ。マア此様な意味合もあつて、骨董は誠に貴ぶべし、骨董好きになるのは寧ろ誇るべし、骨董を捻くる度にも至らぬ人間は犬猫牛豚同様、誠にハヤ未發達の慙むべきものであると云つても可い

のである。で、紳士たる以上はせめてムダ金の拾萬兩も棄てゝ、小町の眞筆のあなめくの歌、孔子様の讀が金で書いてある顔回の瓢、耶蘇の血が染みてゐる十字架の切れ端などゝいふものを買込んで、どんなものだいと反身になるのもマンザラ悪くは有るまいかも知らぬ。

骨董いちりは實にオツである、イキである、おもしろいに違ひ無い、高尚に違ひ無い、そして有意義に違ひない、そして場合によつては個人のため社會のためになる事も有るに違ひ無い。自分なども資産家でさへあれば屹度すばらしい寶物や贗筆を買込んで大ニコくであるに疑ひ無い。骨董を買ふ以上は寶物を買ふまいなんぞといふ其様なケチな事で何様なるものか、古人も死馬の骨を千金で買ふとさへ云つてあるでは無いか。仇十洲の贗筆は凡そ二十階級ぐらゐあるといふ談だが、して見れば二十度贗筆を買ひさへすれば卒業して眞筆が手に入るのだから、何の譯は無いことだ。何だつて月謝を出さなければ物事はおぼえられない。贗物贗筆を買ふのは月謝を出すのだから、少しも不當の事では無い。扱月謝を澤山出した舉句に、いよく眞物眞筆を大金で買ふ。嬉しいに違ひ無い、自慢をしても可いに違ひ無い。嬉しがる、自慢をする。其の大金は喜悅税だ、高慢税だ。大金と云つたつて、十圓の蝦蟇口

から一圓出すのは其人に取つて大金だが、千萬圓の弗箱から一萬圓出したつて五萬圓出したつて、比例をして見れば其人に取つては實は大金では無い、些少の喜悅税、高慢税といふべきものだ。そして其の高慢税は所得税などゝ違つて、政府へ納められて盜賊役人だかも知れない役人の月給などになるのでは無く、直に骨董屋さんへ廻つて世間に流通するのであるから、手取早く世間の融通を助けて、いくらか景氣をよくしてゐるのである。野暮でない、洒落切つた税といふもので、いや／＼出す税や、督促を食つた末に女房の帶を質屋へたゞき込んで出す税とは譯が違ふ金なのだから、同じ税でも新得税などは、道成寺では無いが、かねに恨が數とござる、思へば此のかね恨めしやの税で、此方の高慢税の如きは、金と花火は飛出す時光る、花火のやうに美しい勢の好い税で、出す方も、ソレ五萬兩、やすいものだ、と欣々として投出す。受取る方も、ハッ五萬圓、先づ此位のものをお納めして置きますれば私も鼻が高うございます、と欣々として受取る。悪い心持のする景色では有るまい。誰だつて高慢税は出したからうでは無いか。自分も高慢税は澤山出したい。が、不埒千萬、人生五十年過ぎてもまだ滞納とは怪しからぬものだ。

此の高慢税を納めさせることをチャンと合點してゐたのは豊臣秀吉で、何といつても洒落た人だ。東山時分から高慢税を出すことが行はれ出したが、初めは銀閣金閣の主人みづから税を出してゐたのだ。まことに殊勝の心がけの人だつた。信長の時になると、もう信長は臣下の手柄勲功を高慢税額に引直して、所謂骨董を有難く頂戴させてゐる。羽柴筑前守なども、戦をして手柄を立てる、其の勲功の報酬の一部として茶器を頂戴してゐる。つまり五萬兩なら五萬兩に相當する勲功を立てた時に、五萬兩の代りに茶器を戴いてゐるのである。其の骨董に當時五萬兩の價值が有れば、然様いふ骨董を頂戴したのはつまり筑前守は五萬兩の高慢税を出して喜んでそれを買つたのと同じことである。秀吉が筑前守時代に數々の茶器を信長から勲功の賞として貰つたことを記して居る手紙を、自分の知人が持つてゐる。専門の史家の鑑定に據れば疑ふべくも無いものだ。で、高慢税を拂はせる發明者は秀吉では無くて、信長の方が先輩であると考へらるゝのであるが、大に其の税法を廣行したのは秀吉である。秀吉の智謀威力で天下は大分明るくなり、安らかになつた。東山以來の積勢で茶事は非常に盛んになつた。茶道にも機運といふものが有らう、英靈底の漢子が段々に出て來た。松永

彈正でも織田信長でも、風流も無きにあらす、餘裕も有つた人で有るから、皆茶譚を喜んだ。然し大煽りに煽つたのは秀吉で有つた。奥州武士の伊達政宗が罪を堂々島に待つ間にさへ茶事を學んだほど、茶事は行はれたのである。勿論秀吉は小田原陣にも茶道宗匠を隨へてゐたほどである。南方外國や支那から、おもしろい器物を取寄せたり、又古渡の物、在來の物をも珍重したりして、おもしろい、味のあるものを大に尊んだ。骨董は非常の勢をもつて世に尊重され出した。勿論おもしろくないものや、味の無いものや、平凡のものを持囃したのでは無い。人をして成程と首肯點頭せしむるに足るだけの骨董を珍重したのである。食色の慾は限りがある、又それは劣等の慾、牛や豚も通有する慾である。人間はそれだけでは濟まぬ。食色の慾が足り、少しの閑暇が有り、利益や權力の慾火は斷えず燃ゆるにしても其れが世態漸く安固ならんとする傾を示して來て、然様無暗に修羅心に任せて跳きまはることも無効ならんとする勢の見ゆる時に於て、何様して趣味の慾が頭を擡げずに居よう。況んや又趣味には高下もあり優劣も有るから、優越の地に立ちたいといふ優勝慾も無論手傳ふことであつて、こゝに茶事といふ孤獨的で無い會合的の興味ある事が存するに於ては、誰か茶譚を好まぬも

のが有らう。そして又誰か他人の所有に優るところの面白い、味のある、平凡ならぬ骨董を得ることを悦ばぬ者が有らう。需むる者が多くて、給さるべき物は少い。さあ骨董が何様して貴きが上にも貴くならずに居よう。上は大名達より、下は有福の町人に至るまで、競つて高慢税を拂はうとした。税率は人々が寄つてたかつて競り上げた。北野の大茶の湯なんて、馬鹿氣たことでも無く、不風流の事でも無いか知らぬが、一方から觀れば天下を茶の煙りに巻いて、大煽りに煽つたもので、高慢競争をさせたやうなものだ。扱又當時に於て秀吉の威光を背後に負ひて、目眩いほどに光り輝いたものは千利休であつた。勿論利休は不世出の英靈漢である。兵政の世界に於て秀吉が不世出の人であつたと同様に、趣味の世界に於ては先づ以て最高位に立つべき不世出の人であつた。足利以來の趣味は此人によつて水際立つて進歩させられたのである。其の腦力も眼力も腕力も、尋常一樣の人では無い。利休以外にも英俊は存在したが、少々は差が有つても、皆大體に於ては利休と相呼應し、相追隨した人であつて、利休は衆星の中に月の如く輝き、群魚を率ゐる先頭魚となつて悠然として居たのである。秀吉が利休を寵用したのは、流石秀吉である。足利氏の時にも相阿彌其他の人と、利

休と同じやうな身分の人とは有つても、利休ほどの人も無く、又利休が用ゐられたほどに用ゐられた人も無く、又利休ほどに一世の趣味を動かして向上進歩せしめた人も無い。利休は實に天仙の才である。自分などは所謂茶の湯者流の儀禮などは塵ばかりも知らぬ者で有るけれども、利休が吾邦の趣味の世界に與へた恩澤は今に至つて猶存して、自分等にも加被してゐることを感じてゐるものである。斯程の利休を秀吉が用ゐたのは實に流石に秀吉である。利休は當時に於て言はず語らずの間に高慢稅査定者とされたのである。

利休が佳なりとした物を世人は佳なりとした。利休がおもしろいとし、貴しとした物を、世人はおもしろいとし、貴しとした。それは利休に一毫のウソも無くて、利休の佳とし、おもしろいとし、貴しとした物は、眞に佳なるもの、眞におもしろい物、眞に貴い物であつたからである。利休の指點したものは、それが塊然たる一陶器であつても一度其の指點を経るや金玉たゞならざる物となつたのである。勿論利休を幫けて當時の趣味の世界を進歩させた諸屋の働きも有つたには相違ないが、一代の宗匠として利休は恐ろしき威力を有して、諸屋を引率し、世間をして追隨させたのである。それは利休のウソの無い、秀靈の趣味感から成